

論文

被虐待経験のある自閉スペクトラム症女性のライフストーリー

——育児における連鎖から変換へ——

小 林 孝 子*

I はじめに

本研究は、幼少期に親から虐待を受けてきた自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder: 以下 ASD と表記する）のある女性が、虐待を連鎖させることなく、わが子を養育する経験に着目する。ASD のある女性にとって、臨機応変な対応や他者とのコミュニケーションを求められる子育てには困難を伴うことが多い。成育歴のなかで生きづらさを抱えてきたこととともに、親から虐待を受けてきたことの報告も散見される。たとえば、幼少時より実母から虐待とも思えるような厳しい躰を受け心理的葛藤から実家に育児を頼ることができない事例（飯田・佐藤 2013）、子どもの泣き声で親からの虐待を想起し子どもに対し厳しい叱責をする事例が報告されている（野村 2014）。マルチタスクや想定外のことが生じる子どもの養育に加え、自身が受けた虐待の経験が重複することにより、子育てにおいて重層的な困難を伴うことが想定される。

ASD と被虐待という経験が重なり合うことで、それぞれが独立した状態では生じないことが生じるという、特有の交差が生まれることになる。交差とは、数々のカテゴリーが相互に関係し形成し合っているものととらえ、説明する方法であり、人々が直面している問題を解決する分析ツールとなる（Collins and Bilge 2020=2021: 17）。

ASD と被虐待の経験がそれぞれの育児のありかたに影響を及ぼしあうことになり、この様相を明らかにすることは、どちらかひとつしかない者の経験に関する研究に対して再考を促すことにつながるのではないだろうか。

II 先行研究と本研究の目的

ASD のある女性の子どもの養育に関する研究は、2010 年以降散見される。当初は ASD 特性に関連する妊娠中から育児期にかけての実態とともに、困難さや問題点に焦点が当てられた研究が多く、子育ての困難やニーズ（岩田 2015）、感覚の問題（Gardner et al. 2016）、医療関係者とのコミュニケーションの問題や早産などのリスク（McDonnell and De Lucia 2021）が明らかにされてきた。その後、問題とされることばかりではなく、親としての成長（加藤ほか 2020）、母親の安定をもたらす要因（小林 2022）、母と子のつながり（Dugdale et al. 2021; 小林 2023）など、肯定的側面からみた結果が示されるようになった。他にも、子どものニーズの読み取りができること（Hampton et al. 2022）、自分と同じ ASD の子どもへの理解と共感が高まること（Crane et al. 2021）など、同じ ASD であるからこそ子どものことがわかるという結果も提示されるようになった。

親の子育てには、親自身の受けた育児体験が影響する（渡辺 2016: 18）。被虐待経験のある女性の育児に関する研究では、虐待サバイバーは子育ての場面において自身の被虐待体験を想起し困難感を引き起こしていること（上原 2013）、虐待という苦しい環境から苦しい生き方が生まれ、強い頑張りや我慢によって生活を維持することが心の病

キーワード：自閉スペクトラム症、母親、育児、虐待、ライフストーリー

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2017年度3年次転入学 公共領域
滋賀県立大学人間看護学部 准教授

につながることも報告されている（植原 2022: 75）。寂しさやつらさ、怒りや自己嫌悪などの負の感情が未整理のまま強く残るが（宮口 2022: 64）、虐待を受けた自身に対する内的処理は変容していく（藤野 2010）。虐待サバイバーには否定的自己認知からくる生きづらさや特有の困難が存在しており、育児支援ばかりでなく受容過程への理解と援助が共に充実される必要性が示されている（上原 2013）。

被虐待経験は子ども虐待の保護者側のリスク要因として挙げられ（子ども家庭庁支援局 2024: 27）、虐待を連鎖させないための様々な方策が講じられている。被虐待経験のある親のうち自分の子どもへの虐待の連鎖を断ち切ることができている親は約 4 割であり、その背景に着目することが重要である（三谷 2023: 122）。幼少時に親から虐待を受けた経験をもつ女性が、わが子を育てる経験を明らかにすることは、多様で複雑な課題に直面する ASD 特性をもつ虐待サバイバーである女性への支援に役立つものとなるのではないだろうか。多様な人々への支援は、多様で個別的事であること、違いを高く評価し個人の長所を生かすことが基本になる（美馬 2017）。一人ひとりの在り方に柔軟に対応することにより、違いが困難の源泉とならない社会を作り上げていくことを可能にする（村中 2020: 115-6）。

ASD 特性があることと被虐待の経験はどちらも可視化されにくいマイノリティ問題である。二つのアイデンティティの交差に着目することにより、立体的にその人の立場や経験の複雑さを理解できる（照山 2023: 166）。たとえば、ASD のある人は自助グループで内省し言語化することを糸口にする介入には向いていないこと、もう一つの障害や困りごとのコミュニティの中では典型的ではないとして周縁化され別個の存在とされることなどである（照山 2023: 152-63）。さらに、照山は成人期にある発達障害当事者への調査の中で、困難や葛藤を感じながらも主体的かつ能動的に自分の立場を切り拓いている姿があったこと、支配的文化のなかで規範と揉み合いながら折り合いをつけるために多様で創造的な方略を編み出していることを述べている（照山 2023: 48-9）。これらは、人々が状況を乗り越えるために固有の立ち向かい方をすることや生きるための創意工夫をすることを「生活戦略」と呼んだ桜井の言葉（桜井 2005: 37）をもとにしている論述である。

人々が生きていくときの対し方・処し方については技法があり、先人の対処法をまねることで生きるのが楽になることもある（立岩 2014: 99-107）。ASD と被虐待経験を併せもつ女性がわが子を養育するなかで、固有の立ち向かい方や戦略となるものはあるのだろうか。これらのことを見出すことができれば、対処法として提示できるのではないだろうか。

本研究の目的は、幼少期に親から虐待を受けてきた ASD 女性が、虐待を連鎖させることなくわが子を育てる経験を明らかにすることである。ASD 特性と被虐待という二つの問題を抱える人の育児がどのようなものであるかを仮説的発見的に記述し、ひいては交差の問題を考える一助としたい。

Ⅲ 研究方法

1 協力者

本研究への協力を得られた A さんは、40 歳代、専業主婦、ASD と ADHD の診断を受けている。夫と子ども 2 人の 4 人暮らしであり、子どもは 2 人とも小学生で、療育を受けた経験がある。A さん自身は、幼少時に母親からの虐待を受けていた経験がある。

2 研究デザイン

先行研究での定性的研究は複数名を統合した総体としてのストーリーとして描かれてきたが、他の母親とは異なるプロセスを経験する母親もみられた（加藤ほか 2020）。より個に焦点を当てた研究を蓄積していくことも求められることから、本研究では個別で独自なものを描くことができるライフストーリー法を採用した。

ライフストーリー法の対象となる人々は、マイノリティであり、まだ十分に知られていない社会的・歴史的リアリティの側面を照らし出すことができる（桜井・小林 2005: 28-9）。人生における出来事や経験がどのようにに関連しているのか、他の人々の人生経験にどのように類似し、異なっているのかなどのアイデアを特定のストーリーから引き出すことができれば、単一のストーリーであっても一般化へのステップとなりうる（桜井 2002: 173）。虐待

サバイバーでもある A さんの個のストーリーを追うことで、個性のある独自のアイディアを示すことができると考えた。

3 データ収集方法

2019 年から 2020 年に行った妊娠・出産・育児に関するインタビュー調査の協力者の中に、幼少時より親から虐待を受けていたことを話した女性が複数名みられた。その中からライフストーリー調査の協力を得られた 1 名にインタビューを実施した。手順としては、まずメールで研究概要を説明し、協力の意向を確認した。その後、協力者の希望する場所でインタビューを実施した。インタビュー前に、再度対面で協力依頼内容を説明し、書面での同意を得た。

ライフストーリー・インタビューは、2022 年 11 月対面で実施、2023 年 2 月と 2024 年 1 月にオンラインで実施、合計 3 回実施した。インタビュー時間は 90 分から 100 分であり、同意を得て IC レコーダーを用いて録音し、録音内容はすべて逐語記録とした。

妊娠・出産・育児に関するインタビューは、複数名の語りから安定した育児につながった要因を明らかにしたものである（小林 2022）。A さんには約 60 分のインタビューを実施し、実母から虐待を受けていたこと、自分が幼少時にしてほしかったことをわが子に行うという変換作業についての語りがあった。しかし、そこに至る経緯や内情を知るには至っていなかった。このインタビュー内容は、本研究のライフストーリー・インタビュー時に A さんに問いかけを行う際に参考にした。本稿では、妊娠・出産・育児に関するインタビューと記載した。

4 倫理的配慮

研究協力者に対して、研究の意義と目的、研究方法、個人情報の保護、研究参加は任意であること、途中辞退も保障されることについて、文書を用いて口頭で説明した。これらのことについて、文書による同意を得てインタビューを実施した。本研究は、公立大学法人滋賀県立大学における人を対象とした研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号第 855 号）。

Ⅳ 結果

ライフストーリー・インタビューの結果から、まず特徴的な育児の経験を述べ、それらの経験につながる幼少期から出産までのライフストーリーを述べる。最後に、現在の育児の経験を述べる。A さんの語りには「 」をつける、あるいは字下げをして記載した。また、趣旨をかえない範囲で言葉を省略し、個人の特定につながる内容には意味内容を損なわない範囲で修正を加えた。

1 懸命に努力を重ねる子育て

A さんにとって子どもを育てることは、将来子どもが自分と同じようなつらい思いをすることがないようにという考えが礎となっていた。

幼少期に実母から、できなければ叩かれることを繰り返されてきた A さんは、普通の子育てや正しい子育ては全く知らないことであり、ゼロから始める必要があった。子どもにとって一番良い方法を見つけ出すために、懸命に努力した。

1) 親からされたことと逆のことをする変換作業

第 1 子出産後、A さんには子どもへの愛情がわき出る感覚はなかった。しかし、虐待を受けたことのある人は虐待をしてしまう可能性が高いというデータがあることを調べ、A さんは自分の母親を反面教師にすることを常に意識した。「殴るはハグ」「たたくという行為は抱きしめる」という母親がしたことの逆をすればよいと考え実践した。これは、妊娠・出産・育児のインタビュー時には、「変換作業」という言葉で語られた内容である。

やっぱりたたく人のイメージがつかないですね。私からしてみれば感情が薄い人間なので。怒ったりとかたたいたりとかするぐらいまでカーッてなる気持ちがちょっと理解できないっていうか。他の人がコップ1杯の気持ちがあったら私はたぶんコップ半分ぐらいの気持ちしかないから、怒るっていうところも沸点まで達することができないので、ある程度理性で抑えられるんじゃないかなと思って。

Aさんに感情が全くないわけではなく、子どもを叱ることや怒ることもあったが、子どもをたたくまでの怒りに達することはなかった。

うちの母親が発達だったら、手、出すかな。出さないですよ。だから、普通の親なんだと思う。マジョリティなんだと思うんですよ。そんな感情的になれるかっていう。だから、私が発達じゃなかったら、たぶんたたいてたんでしょね、子どものこと。たたく意味がないし、たたく必要がないじゃないですか。

これは、マジョリティである母親とASD特性のある自分を対比させた語りである。意味のないことはしないとは、Aさんがインタビュー時に何度も使用した言葉でもある。さらにAさんは、子どもを叱る場面では、説得と納得のプロセスが重要であると考えていた。

努力しなければ絶対にできないです。だって、普通に怒っちゃうじゃないですか。「駄目だよ、それ」とかって。それをぐっところえて「これはこうで、こうだから、こうなんだよ」みたいな感じで言うのって、難しいじゃないですか。恐怖で支配しても何の意味もないし、説明してもすっとんと落ちてくれないし、こんなつらいことってないんですよ。だけど、それでも仕方がないって思いながら、いつか分かってもらえんと思って説明を続けるっていう行為って相当むなしいし、相当努力が必要だし、自分自身も納得できるものがないと。それが自分のバックボーンみたいな。

子どもに説明を繰り返し納得してできるようになるプロセスは、Aさん自身は幼少期に経験してこなかったことである。Aさんは、「発達には説明が必要」であること、できるようになることが自己肯定感につながることを自身の高校での経験から学び、納得するまで子どもに説明を繰り返した。例を挙げると、子どもには、なぜ学校に行くのかを説明し、行かないという選択肢もあることも含め、子どもが納得できよう説明を繰り返していることを教えてくれた。何年かかるかはわからないが、その瞬間に伝えないと意味がないことから常にアンテナを張っていることも教えてくれた。この実践を継続することは、Aさん自身の精神的支柱となっていたが、その背景には過酷な幼少時の経験があり、同じつらい思いを子どもに経験させたくないという強い思いが存在していた。

2) 膨大な量を寄せ集めて一番よいものを見いだす

自分の母親を反面教師にすることでわが子へのかかわり方を模索し続けてきたが、Aさんにとって他にも努力を要することがあった。それは、他の母親を観察することにはじまる。参考になる母親のみに限定せず、参考にならない母親も反面教師として観察する毎日を繰り返し、「普通のお母さん」に近づくことや、「子どもにとって一番良い方向性」を見つけ出すために試行錯誤を繰り返した。

私が持っていないカード、真っ白な状態のカードを埋めていく作業で、いいか悪いかの判断材料も正直自分にはあまりなかったりとかするので。もうとにかく膨大な量を集めて、その中から、平均的にいいと思えるものだけを出してこなければいけないっていうのは、かなりしんどい作業で。たぶん、他のお母さんたちは何も考えずにできるんだと思うんですけど、それを見つけ出す作業がめちゃくちゃ難しかったです。

Aさんが観察した母親たちは、ショッピングモールや近所の母親たちである。「何から何まで」「服装から見た目から全部」「一挙手一投足」すべてを観察した。そこにはAさん独自の方策があり、パターン化し、パターン化した

カードを増やしていくという作業であった。そこから、母親らしい服装、母親らしいふるまい、子どもとの接し方、日々の行動などあらゆる生活場面ですべきことを組み立てていった。

普段、日常的に親を観察するんですよ、同じ立場なので。観察して、こういう親になりたくない、こういう親になりたい、こういう親になりたくない、こういう親になりたい。こうするべき、こうしないべき、こうするべき、こうするっていうのを分けていくんですね。最終的に私の母親像が出来上がるっていう。

もともと Aさんは、人に対する関心は薄く、この試行錯誤は周囲に母親たちがいたからこそできたことであった。このような試行錯誤のプロセスは、「子どもの頃のつらかった記憶と重ね合わせ、一番ベストな完成させた母親像を子どもたちに投げ掛けてみる」ということの実践につなげ、失敗したらまた別のパターンでやり直すことを繰り返すことであった。

何か感情ありますかって言われたら、全然、ぽっかりしてるので、何もないですね。パターンがあるだけで。だからその黄金のカード、銀のカード、パターンカードみたいな。はい、どれ出す？みたいな。今日はどれ出す？みtainな感じです。

Aさんは、強いカードを何枚もてるかが重要であり、年齢を重ねると強いカードが増えることも説明した。このような一連の作業を行う Aさんは、自分のことを「ペタペタ貼り合わせたような人間」と表現し、「あえてこうしようと思ってやってるわけではない」「自分が積み重ねてきた結果こういうふうな子育てしかできてない」とも話した。自分が何者でもないような感覚のなかで、膨大な情報を収集しパターンをみつけ駆使する作業は、常に気を張り、頭をフル回転する作業の繰り返しであり、Aさんは「血を吐くような努力」という言葉を用いて説明した。

3) ルールに則り親役割を遂行する

Aさんの第1子は3歳の頃に発達障害の診断を受け、その際に自分も同じではないかと思い、Aさん自身も診断を受けている。Aさんは、自身が診断を受けた際に涙が止まらず、自分の育ってきた経緯からつらい思いが湧き出たことを話してくれた。

障害？生まれた時から？じゃあ、あのちっちゃい時からのあれは全部そうだったのみたいな。もうそんなのがバーッてめぐってきて、本当になんていったらいいんだろう、じゃあ、あれ二次障害だったのとか。私が今ずっといた環境って最悪の環境だったんじゃないっていうことが分かって。もうあの時は本当に整理ができなかったですね。

Aさんにとって診断は「残酷な宣告」であり、自身が育ってきた環境が「最悪」であったことを振り返り、生きることについて語り続けた。

でも、でもですよ。それを生きる。今は生きなければいけないっていう状況だから、生きるじゃないですか。ということは、生きることに本気になるんです。今は、じゃ、子どもたちのために生きるっていうこと、取りあえずしておこう。そこにフォーカスをしようみたいな感じで。もうそれも結局、そういう淡々と決まっていくものなので。

子育てについて「子どもを育てるのは親の義務っていうふうに決まってる」「ルールはめっちゃくちゃ守る」という考えが常にあり、Aさんは決まっていることに則って、子どもたちのために生きることを決意している。子どももAさんも同じ発達障害であることがわかったことになるが、Aさんには「申し訳なさ」「うしろめたさ」が残った。しかし「一回は嘆くが、次に何をすればよいかを考える方が早く確実」と考え、感情に流されることはなく、親と

して何をすべきかを効率的に進めることに切り替えている。意味のないことはしない、感情に流されない、決まっていることに則る、効率的に進めていくという思考は、Aさんの強みとなり、親役割の遂行につながっていた。

4) 生活維持のためにサポートを活用する

Aさんにとって自身が診断を受け、その後に「自分にはどういう特徴があるのか」を自覚することは重要なことであった。Aさん自身は、人への関心は薄く、人と話をすることで気持ちが楽になることもない。ママ友との関係も「どうでもよい」と思っている。対人関係で意識していることは、人に迷惑をかけないことであり、この点はルールとして守るように努力していた。Aさんにとって、情緒的なつながりやサポートよりも、実用的なサポートが有用であり、社会のなかのルールを守ることが重視されていた。

実用的なサポートが有用であるという点について、生活を維持していくために「三種の神器」があり、「気の合うお医者さん、ヘルパーさん、お薬、三種の神器ですね」と教えてくれた。Aさん一人で全て行っているわけではなく、信頼できるヘルパーと医師との出会いは必須であり、Aさんにとって、とても役立つサポートとなっていた。ヘルパーには、外出や料理のほか、書類の整理や部屋の片づけなど、Aさんが苦手であることを代行してもらい、教えてもらうこともあった。家事や子どもの送迎など、夫の協力を得ることも多くあった。また、Aさんの生活は、「寝ることから起きるところから日中活動するところまですべて薬でコントロールしてます」という状況であり、薬も重要な助けとなっていた。家族の他にも医師とヘルパー、薬という効果的な助けを活用することが、Aさんにとって生活戦略となり、Aさん自身が生活をコントロールすることにつながっていた。

2 幼少期からの過酷な人生

Aさんの子育てには、自分と同じつらい経験を自身の子どもには経験させたくないという思いがベースにあった。育ってきた環境が最悪であったという語りもみられたが、その環境や経験がどのようなものであったかを記述する。

1) 「日常生活すべてが地獄」だった幼少期

妊娠・出産・育児に関するインタビュー時に、幼少時に母親から虐待を受けていたことを話してくれたAさんに、子どもの頃の思い出をたずねたところ、次のような語りが得られた。

私が一番小さい時の記憶で残ってるのは、ベビーベッドに寝てる妹に近づこうとしたら母親に殴られたっていう記憶からが一番鮮明かな、小さい時は。それがたぶん、一番小さい時の。寝てたか何かで。2歳くらい。衝撃的だったかな、分かんないけど、覚えてる。うっすらとだけど、寄っていきこうと思った時に、殴られたのは。

Aさんは大都市周辺のベッドタウンで幼少時から成人期までを過ごしている。父と母、妹と暮らしていたが、母親は「恐怖の対象」であった。父親も厳しく、「両親ともども近寄りがたい存在」であった。Aさんが大人になってから祖母に確認したところ「虐待を受けていた」ことを教えてくれたという。最も信頼してたのは祖母であった。さらにAさんは、母親から受けた虐待の様子を鮮明に話してくれた。

一番覚えてるのは、よくほった張り倒されて、子どもだから床の上に転がるんです。それを見上げて、鬼のような形相をしている母親の思い出がずっとあって。そのあと、階段を下りて、トイレに駆け込んで、いつか、この人を、大人になったら絶対に殺せるから、その日まで我慢しようっていつて。トイレを流しながら思いっきり泣いてっていうのを繰り返してましたね。

小学校入学後も母親から責められる日々が続き、Aさんにとっては「日常生活すべてが地獄」であった。母親からは宿題がわからないだけでたたかれる日々が続き、悪夢やフラッシュバックで夜眠ることができず、毎朝遅刻することの繰り返しが6年間続いた。また、「どんなに頑張っても授業が分からない」と、自分では解決できない問題を抱えていた。

学校生活では助けを求め、ケアを受けることができる場として保健室があるが、「本当にしんどい人が利用する場所だから、普段は入っちゃ駄目っていうイメージがあった」とのことです。Aさんにとって、教室で過ごす時間は苦痛が大きく、チャイムの音、木の椅子に座り長時間同じ姿勢で過ごすことや共同作業も苦手であった。特別支援の教室は、絨毯敷きでおもちゃがあり、授業らしい授業をしているわけではないことに憧れをもっていた。

あの時代を思い出したら、何とか学級とかにいた子たちってすごい差別されてましたよね。だから、良かったって思いました。診断、受けないで。結構、ひどいこと言う子いたじゃないですか。だから、あそこの学級に行きたいと思ったことはあったんですよ。私、こっちの気がするって、行きたいと思ったことはあったけど、行ったら差別される。これ以上差別されたら、もう私、生きていられないと思ったんで。

子どものなかでも差別されると感じ、Aさんは「これ以上差別されたら」という言葉を重ねることで、差別されることの恐怖を説明している。当時は教師からもいじめられ、落ちこぼれとみられていたというように、Aさんにとって学校生活も厳しい状況であった。その頃の事を「誰でもいいから何のために学校へ行ってるのか教えてと思っていた」と、学校に行く意味がわかっていれば状況は変わっていたかもしれないと話している。このことは、Aさん自身の子どもに、学校に行く必要性を説明し、納得して通学できるよう働きかけていることにつながっている。

2) わかることを経験するが苦しみが続く進学・就職

Aさんは成績が良くなかったことから、「底辺の高校」と称される高校に通うことになる。しかし、そこでこれまでになかった経験をするようになる。

そこで成績がうなぎ登りになったんです。クラスで2位とか、すごい成績が良くなっちゃって。勉強する意味が分かったんです。勉強の仕方の意味も分かったんです。要は、その学校は、頭の悪い学校だから同じことばかり繰り返すんです。だから、繰り返してすごい得意じゃないですか。なので「すごい楽だ。繰り返せばいいんだ。こうすればいいんだ」みたいな。

Aさんは、成績優秀な高校生であった。小中学校とは異なり、できることを経験する学校生活を送ることができた。意味がわかることにより納得し、できることを経験したAさんにとって、高校生活はまさに意味のあるものとなった。ここで得られた、意味が分かることの大切さには、Aさん自身の子どもへのかかわりにもつながっている。

卒業後は専門学校に進み、希望どおりの職に就くことができた。朝起きることが苦手でマルチタスクも苦手であったが、なりきることは得意であり、仕事を6年継続している。しかし、当時Aさんの家庭は複雑な状況にあり、そこに仕事のストレスが加わり、多重人格が出現した。この時期、Aさんは精神科に通院し、治療を継続している。「そこがもう一番、暗黒」「完全な二次障害であった」と当時のことをAさんは説明し、「とりあえず人生ベースきつかった」「常に何かしらに苦しんだ」と人生を振り返った。その後、語学留学やアルバイトを経て、Aさんは結婚し、子どもを2人出産した。その後も、子どもの成長に伴い試行錯誤を続けながら子育てを行っている。

3 子どものために機能する毎日

子どもたちが小学生になり「自分が全部やらなきゃいけないから返してくれるようになった」という変化もみられ、Aさんは幸せを感じるようになっていった。しかし、日々悩むこともあった。生活の様々な場面で子どもに説明し、子どもが納得できることを常に頭に置いていたが、説明がうまくいかず子どもが間違った方向に進むことを心配するようになった。同じ診断名でもあり、自分が一番よく分かっていると思う一方で、「人間が違うので難しい」という迷いもあり、勉強を教えるなどを子どもにしてやれないことで寂しさもあった。Aさん自身が経験していないことやわからないことについては教えられないこともあり、子どもの成長を肯定的に受けとめながらも、複雑な気持ちが続いた。

「小さい頃にあれだけ駄目だったたかかれたりとかしてたら、もう自分っていうものはなくなってしまう」と振り

返り、自分の人生はもう終わっているという感覚も抱いている。しかし、「子どものために育てることを決めたから今頑張っている」と次のように話しをした。

子どもがいるから私は機能するわけであって、子どもがいなければ機能しなくなっちゃうので。私にとって1人の時間は今、必要ないので、子どものために生きてるという感じなので。この子どもがいらない時間はどうすればいいのかなとは思います。何のために使えばいいのかっていうふうになってしまいます。そういう葛藤はやっぱりあるんですかね常に。だけでも、切り替えはできるんですよね。

Aさんにとって、子どもたちの学校での教員や保護者との関わりが増え、人間関係は日々壁となっている。

このように、Aさんは自分の限界を感じ、人間関係の壁にぶつかりながらも、子どものために切り替え、子どものために生活している。「子どもが社会に出るように送り出してあげること」を目指し、今はそこに力を注ぐときであり、できる限りのことをするという強い意思をもちながら生活している。

V 考察

Aさんのライフストーリーより、幼少時に母親からの虐待を受け、ASD特性もあり家庭や学校、職場でも厳しい生活を送っていた経験を明らかにできた。人生がきつかったこと、常に何かに苦しんだことが語られていた。しかし、Aさんは、自らをコントロールするための方略を自ら編み出し、同じ特性をもつ子どもへのケアを誰よりも子どもを理解したうえで実践し、壁にぶつかりながらも子どもの自立を目指して日々努力を重ねていた。このようなAさんの経験を、重複する特性が関連する交差性の視点、そこから生まれる強み、生活のなかで編み出される戦略と支援の視点から考察を加える。

1 ASDと虐待サバイバーの交差性

まず、ASD女性であり虐待サバイバーであるという二つの特性が関連する交差性の視点から検討する。交差性は、差別をめぐる議論でもある。差別の一要素として「別」があり、これは集団間に対する異なる扱いを意味し、集団間を比較したうえで一方の集団に属する個人をおとしめる扱いであることを意味している（土屋編 2023: 220）。幼少時より母親から受けてきた虐待はAさんときょうだいや他の子どもたちとの「別」を感じさせる事象であったといえる。教師からもいじめられていたという環境は「最悪の環境」であり、「これ以上差別されたら生きていけない」状況であった。「地獄」と語られる経験をしたAさんは、同じ思いを子どもに経験させたくないという強い思いを抱き、自身が受けてきた虐待が連鎖することがないように血のにじむような努力を重ねることにつなげていた。

Aさんは、子育てに感情は入らないこと、役割を果たすために多大な努力を要したことを語った。Aさんにとって感情はまったくわからないことであり、日常生活や対人関係において支障となりマイナス面も生じる。虐待サバイバーの子育ては、子どもを叱っている時に親から虐待を受けていた自身が重なること、悲しみや恐怖という否定的感情により十分な育児を行うことができず虐待につながるということが報告されている（上原 2013）。ASD特性があることと虐待サバイバーであることは、どちらも子育てにおいてマイナス面があるといえるが、ASD特性による感情の平坦さにより、虐待サバイバーとしての負の感情を想起させることなく子育てが行えていたと考えることができるのではないだろうか。

これは、上野（1996: 204）の示す強化や補償と同様であるといえるのではないだろうか。交差性に関連する議論の日本での代表例として挙げられる一つに、上野の複合差別がある（土屋編 2023: 224）。上野は複合差別を論じるなかで、「マイナスとマイナスが掛け合わされてプラスになるような逆転現象が起きることもある」（上野 1996: 214-5）と述べている。上野の見解はエスニック・マイノリティに関連するものであるが、プラスになる場面があることについては、Aさんの事例にも見出された。

2 ケア役割の遂行と A さんの強み

A さんにとって子どもをケアすることは、状況的なケアを担う役割によって導かれ、それは淡々と決まっていくことであった。出産後すぐに母性が芽生えることはなく、後の子育てでは多大な努力を重ねていた。ここでは、A さんの語りのなかにもみられる、自然に湧き上がる母性と、役割遂行のためのケアの両者を提示しているノディングスの理論を用いて検討する。

ノディングスのケアリング論では、愛や心のような自然にตอบสนองする関係により生じる自然なケアリング、そして、よいと感じるような人間的な状態を望み、道徳的でありたいという動機づけによって生じる倫理的ケアリングがある。わが子との関係は自然なケアリングに支配されているとされる (Noddings 1984=1997: 68)。A さんのインタビューでは、感情的に自然と湧き上がる気持ちが語られることはなく、強く語られたことは、「子どもを育てるのは親の義務」「自分と同じようにならないために」「血を吐くような努力」であった。ノディングスは、倫理的ケアリングでは、自然なケアリングには必要とされない努力を要することを示している (Noddings 1984=1997: 124-5)。必要性からケアすることが導かれ、努力を要する点では、A さんのケアは倫理的ケアリングであるといえる。

ノディングスは、倫理的ケアリングが自然なケアリングより高次であるということではないとも述べている (Noddings 1984=1997: 125)。A さんの場合は、ノディングスが示すわが子への自然なケアリングとは一致していないが、倫理的ケアリングと自然なケアリングに優劣はないことから、A さんのケアに多くの母親にみられる自然なケアリングがみられないことへの批判を受ける理由はない。むしろ、倫理的ケアリングを意識することは、虐待の連鎖を生じないことにつながっていたのではないだろうか。

子どもの虐待発生要因のひとつとして、日常生活でのストレスが原因となり情緒的統合の乱れが生じていることが事例分析により明示され、我慢できずたいて怒ってしまうことや子どもの行動にイライラすることが挙げられている (友田・杉下 1997)。自然にตอบสนองする愛や心によるケアの限界があることから、状況的な親役割を遂行する A さんのような倫理的なケアリングが有用となること、この親役割の遂行能力は、A さん自身の強みとなっているといえるのではないだろうか。個人的な特徴が強みとして機能するかどうかは環境に依存しており、周囲の理解や対応が不十分であれば強みはいかされないことに支援者は十分留意すべきである (古長 2022)。

A さんが努力と論理的思考のもと子どもの養育ができた背景には、家族、医師やヘルパーなどの周囲の人々の支援によって、A さんが自身と自身がすべきことを理解し、それを淡々と実践できる環境が整えられたからであり、A さんの特性が強みとして発揮できた環境があったともいえる。

また、被虐待という経験をもつ A さんにとって、レジリエンスという視点からも分析できる。人生早期に耐えたい逆境を経験しても強く生きのびている人がどのようなレジリエンスを発揮したのか、どのようなレジリエンスを高める要因があったのかに注目することは、逆境を乗り越えていくための重要なヒントを与えてくれる (三谷 2023: 126-8)。レジリエンスとは、アメリカ心理学会の定義によると「逆境、トラウマ、悲劇、脅威、極度のストレスに直面する中で適応していくプロセス」を意味する (Southwick 2012=2015: 26)。

人生の危機を乗り越える処方箋として示された項目から A さんの経験を分析する。レジリエンスを発揮するための原動力として、道徳指針を強化する (Southwick 2012=2015: 96)、生きる意味を見いだす (Southwick 2012=2015: 256)、レジリエントなロールモデルを真似ること (Southwick 2012=2015: 165)、社会的なサポートを受ける (Southwick 2012=2015: 145) ことが A さんの経験と一致している。A さんの語りにあるように、自分と同じつらい経験をさせない、感情を混入せず意味のないことはしない、生きる意味を見いだす、反面教師としてネガティブなロールモデルを用いる (Southwick 2012=2015: 174)、医師やヘルパーからのサポートを得て生活を整えること等が挙げられる。このようなレジリエンスを高める視点からのサポートも重要となる。

3 生活のなかで編み出される戦略と支援

A さんは、同じ特性をもつわが子のことを誰よりも理解し、同じ特性をもつことは、A さんの強みともなっていた。また、実用的なサポートを活用し、パターン化と論理的思考により、淡々と子育てを行っていた。これらのことは、本人の努力と工夫により編み出されたものであり、子どもを育てるうえでの戦略となるものと考えられた。

しかし、子どもが自立するまで育てなければならないという思いと、自分の人生はもう終わっているという思い

がベースにあること、他の基準に合わせることで消耗を考慮すべきであり、Aさんの努力のみに頼ってしまうことは危惧される。

生まれつき骨が弱いという特徴をもつある女性は、同じ特徴を受け継ぐ子どもを育てた経験から、「子どもの時にいやだったことはしない、あるいは、子どもの時にしてほしかったことをする」という意識で子育てを始めることが重要であると述べている。子どもは社会的な存在であり、子どもの育ちには大勢の人が必要であることから、たくさんの人の中で子どもが育っていけるよう助けを求め続けることも勧めている（安積遊歩・安積宇宙 2019: 18-9）。Aさんのように、信頼できる人とのつながりと助けてもらうことが選択できる環境が重要となる。

また、幼少時に逆境的体験のある人が被る多大な不利は、その事実を見ようとせず対応をしてこなかった社会の怠慢の産物だという指摘もある（三谷 2023: 192-3）。Aさんがパターン化を駆使して最善の方法を模索するプロセスは大きな負担を伴うものであった。すぐれた作業記憶能力や計画能力を持つASDの人は、神経定型の世界で作動する規則を学び、対人行動を観察し調べ上げ、期待されている反応の仕方を突き止めるかもしれないが、このような心身を疲弊させる接近方法を勧めないという見解もある（Fletcher-Watson 2019=2023: 85-6）。個人の努力に委ねられることもあってはならない（土屋 2019）。困難さを過小評価するような過度な楽観性につながらないこと（古長 2022）に留意しながら、個人の強みを発揮できる環境が望まれる。

Ⅵ おわりに

ASDと被虐待経験のある女性が、虐待を連鎖させることなく自身の子どもを養育する経験を詳らかにしてきた。ASDと被虐待経験という特性が重複することにより、マイナス面だけではなくプラス面も生じていたことを明らかにできた。特に、ASD特性としてマイナス面にみられることが多い感情の平坦さは、虐待の連鎖を生じさせないという点において有用であり、論理的にパターンを駆使する思考は、大きな負荷を伴うものの親役割の遂行に有用であったと考えられた。また、これらのことは、サポートを活用しながら本人の努力と工夫により編み出されたものであり、戦略や強みになると考えられた。

本研究は、1事例のライフストーリーより導かれたものであり、一般化するには限界がある。しかし、重複する特性をもち問題が生じている場合には、一方が他方の問題解決の糸口となり得ることを示すことができた。マイナス面に着目した問題解決志向や努力を求める支援の在り方を再考し、個人の特性と強みを尊重した個別性の高い支援構築の一助とすることができるだろう。

文献

- 安積遊歩・安積宇宙, 2019, 『多様性のレッスン——車いすに乗るピアカウンセラー母娘が答える 47 の Q&A』 ミツイパブリッシング。
- Collins, Patricia Hill and Sirma Bilge, 2020, *Intersectionality 2nd Edition*, Cambridge, Polity. (= 2021, 小原理乃・下地ローレンス吉孝, 『インターセクショナリティ』 人文書院.)
- Crane, Laura, Lok Man Lui, Jade Davies and Elizabeth Pellicano, 2021, "Autistic Parents' Views and Experiences of Talking about Autism with Their Autistic Children," *Autism*, 25(4): 1161-1167.
- Dugdale, Amber-Sophie, Andrew R Thompson, Alexandra Leedham, Nigel Beail and Megan Freeth, 2021, "Intense Connection and Love: The Experiences of Autistic Mothers," *Autism*, 25(7): 1973-1984.
- Fletcher-Watson, Sue and Francesca Happé, 2019, *Autism: A New Introduction to Psychological Theory and Current Debate*, London, Routledge. (= 2023, 石坂好樹・宮城崇史・中西祐斗・稲葉啓通『自閉症——心理学理論と最近の研究成果』 星和書店.)
- 藤野京子, 2010, 「児童虐待を受けた女性サバイバーが 30 歳代に至るまでのプロセス」『犯罪心理学研究』 47(2): 33-46.
- 古長治基, 2022, 「自閉スペクトラム症児者の『強み』に関する研究の概観と展望『自閉症スペクトラム研究』 20(1): 5-13.
- Gardner, Marcia, Patricia D. Suplee, Joan Bloch and Kalen Lecks, 2016, "Exploratory Study of Childbearing Experiences of Women with Asperger Syndrome," *Nursing for women's health*, 20(1): 28-37.
- Hampton, Sarah, Joyce Man, Carrie Allison, Ezra Aydin, Simon Baron-Cohen and Rosemary Holt, 2022, "A Qualitative Exploration of Autistic Mothers' Experiences II: Childbirth and Postnatal Experiences." *Autism*, 26(5): 1165-1175.

- 飯田法子・佐藤晋治, 2013, 「自身が高機能広汎性発達障害をもつ母親の『愛着』からみた育児支援——『内的作業モデル測定尺度』と『語り』による4事例の報告」『別府大学短期大学部紀要』32: 95-106.
- 岩田千亜紀, 2015, 「高機能自閉症スペクトラム障害（ASD）圏の母親の子育てにおける困難とニーズ——当事者に対する質的研究に基づく分析」『社会福祉学』56(3): 44-57.
- 加藤まり・門間晶子・山口知香枝, 2020, 「知的障害を伴わない自閉症スペクトラム障害（ASD）がある母親の子育て」『日本看護研究学会雑誌』43(2): 163-175.
- 小林孝子, 2022, 「自閉スペクトラム症の特性がある母親の育児の経験——安定につながる要因の検討」『立命館生存学研究』6: 105-116.
- 小林孝子, 2023, 「産後子どもをかわいいと思えなかった母親が子どもとの間に形成する絆——自閉スペクトラム症のある女性の語りから」『Core Ethics』19: 85-97.
- こども家庭庁支援局, 2024, 『子ども虐待対応の手引き』.
- McDonnell, Christina G. and Elizabeth A. DeLucia, 2021, "Pregnancy and Parenthood Among Autistic Adults: Implications for Advancing Maternal Health and Parental Well-Being," *Autism Adulthood*, 3(1): 100-115.
- 美馬達哉, 2017, 「脳多様性論（neurodiversity）と発達障害支援」『精神科治療学』32(12): 1643-1648.
- 三谷はるよ, 2023, 『ACE サバイバー——子ども期の逆境に苦しむ人々』筑摩書房.
- 宮口智恵, 2022, 『虐待したことを否定する親たち——孤立する親と子を再びつなげる』PHP 新書.
- 村中直人, 2020, 『ニューロダイバーシティの教科書——多様性尊重社会へのキーワード』金子書房.
- Noddings, Nel, 1984, *Caring: A Feminine Approach to Ethics and Moral Education*, Oakland, University of California. (= 1997, 立山善康・清水重樹・新茂之・林泰成・宮崎宏志『ケアリング 倫理と道德の教育——女性の観点から』見洋書房.)
- 野村和代, 2014, 「発達障害特性をもつ親への支援」『臨床心理学』14(5): 646-650.
- 桜井厚, 2002, 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- 桜井厚, 2005, 『境界文化のライフストーリー』せりか書房.
- 桜井厚・小林多寿子, 2005, 『ライフストーリー・インタビュー——質的研究入門』せりか書房.
- Southwick, Steven M. and Dennis S. Charney, 2012, *Resilience: The Science of Mastering Life's Greatest Challenges 1st Edition*, Cambridge, Cambridge University Press. (= 2015, 森下愛・西大輔・森下博文, 『レジリエンス——人生の危機を乗り越えるための科学と10の処方箋』岩崎学術出版社.)
- 照山絢子, 2023, 『発達障害を人類学してみた』診断と治療社.
- 友田尋子・杉下知子, 1997, 「子供を虐待する母親3例の検討」『家族看護学研究』3(1): 38-46.
- 土屋葉, 2019, 「障害のある母親として地域で暮らす——語りから読み解く身体障害のある女性の『生きづらさ』(2)」『愛知大学文学論叢』156: 25-48.
- 土屋葉編, 2023, 『障害があり女性であること——生活史からみる生きづらさ』現代書館.
- 植原亮太, 2022, 『ルボ虐待サバイバー』集英社.
- 上原由紀, 2013, 「被虐待経験を持つ母の育児困難感に対する援助について——虐待記憶の想起が育児に及ぼす影響との関連を中心に」『武蔵野大学人間科学研究年報』2: 101-116.
- 上野千鶴子, 1996, 「複合差別論」井上俊他編『差別と共生の社会学』岩波書店, 204.
- 渡辺久子, 2016, 『新訂増補母子臨床と世代間伝達』金剛出版.

Life Story of an Abused Woman with Autism Spectrum Disorder: Transforming from the Cycle in Childrearing

KOBAYASHI Takako

Abstract:

Since abused women with autism spectrum disorder (ASD) face multi-layered difficulties in childrearing, highly individualized support is necessary. This study aimed to reveal the experiences and strategies of a woman who had been abused by her own mother in childhood as she raised her children without perpetuating a cycle of abuse. We conducted a life story interview with one woman, allowing for her distinctive experiences to be described. The results revealed the process of transition from her early childhood, when her day-to-day living was hellish in all aspects, to her continued suffering in going on to school and finding a job, leading to her marriage, child birth, and finally childrearing. The woman practiced the transformational task of doing the opposite of what she had been subjected to by her own mother in childrearing, making efforts to observe other mothers to collect vast amounts of information and create a pattern. These findings suggest that the characteristics of ASD, including emotional flatness and logical thinking, can be considered strategies and strengths, as they may help prevent the cycle of abuse from perpetuating and are useful in carrying out parental roles.

Keywords: ASD, mother, childrearing, abuse, life story

被虐待経験のある自閉スペクトラム症女性のライフストーリー ——育児における連鎖から変換へ——

小 林 孝 子

要旨：

被虐待経験のある自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder: ASD）女性の子育ては重層的な困難を伴うことから、個別性の高い支援が必要とされる。本研究の目的は、幼少期に母親から虐待を受けたことがある ASD 女性が、虐待を連鎖させることなくわが子を育てる経験と戦略を明らかにすることである。個別性を描くことができるライフストーリー・インタビューを1事例に実施した。その結果、日常生活すべてが地獄だった幼少期、苦しみが続く進学・就職を経て結婚・出産・育児に至るプロセスを明らかにできた。ASD 女性は子育てにおいて自身の母親から受けたことと逆のことを行うという変換作業を実践し、他の母親を観察して膨大な情報を集めパターン化するという努力を重ねていた。ASD 特性である感情の平坦さや論理的思考は、虐待の連鎖を生じさせない点や親役割の遂行に有用であり、戦略となり強みになると考えられた。